子どものための哲学（P4C）の授業のために

――探求の共同体の形成――

大阪教育大学／武庫川女子大学　名誉教授
桝形　公也

授業中の思考の過程を可視化し、子どもに返してあげて、会話を深めていく。

子どもに P4C のメタレベルでの認知を促す装置。そして、*授業中に子ども自身がこのような形で質問ができるようにする。主体的な学習態度を育成する。*

目次

１．議論をするときに役に立つ表現（これは国語でもすでに強調されていること）
２．議論に参加する人がとることが求められる態度
３．教師の役割
４．子どもたちの発言の分析
５．評価
６．子どものための哲学への主題の例
７．エクササイズ
参考文献

1. 議論をするときに役に立つ表現（これは国語でもすでに強調されていること）

1.1　自分の考え／意見を述べるとき

「私は～と考えます／思います、なぜなら…だからです」
「私は～という意見です、というのは…だからです」
「私の考えでは～です、なぜなら…と思うからです」

1.2　自分の考え／意見をはっきり述べる

「私の言いたいこと／言いたかったことは、～です」
「はい、私が言いたいのは／言いたかったのは、それです」
「いいえ、私の言いたいこと／言いたかったのは、それではありません」

1.3　自分の考え／意見が理解されているかどうかチェックするとき

「私の言っていること／説明が、分りますか／はっきりしていますか」
「どういう意味か分かりますか」

1.4 自分の話をまとめる

「私が言いたかったのは、～です」

「みんなの意見は、～だと思います」

1.5 相手の意見に賛成のとき

「私は A さんの意見／考えに賛成です、なぜなら…だからです／と思うからです」「私も A さんと同じ考えです、なぜなら…だからです／と思うからです」

1.6 相手の意見に賛成しないとき

「私は A さんの意見／考えに賛成ではありません、なぜなら…だからです／と思うからです」「A さんの意見は、とってもいいと思います／なるほどと思います、しかし～ということもあると思います（ので賛成ではありません）」

1.7 相手の意見をほめる

「A さんの考えは素晴らしいと思います」「その通りだと思います」「A さんの言う通りだと思います」「とってもいい考えだと思います」

1.8 相手に積極的に聞き、質問をする

「どういう意味ですか」

「どういうことですか」

「もう一度、言ってくれますか」

「たとえば？」

「もう少し、詳しく説明してくれますか」

「それは、～ということですか」

「A さんの言っていることは、～ことだと思います」

1.9 どういう質問をするのか（質問の 5W1H）

What? 「それは何ですか」（「どういう意味ですか」「どういうことですか」）

Who？ 「それは誰のことですか」（「誰と同じ意見ですか」「誰がそのように考えていると思いますか」「誰かが同じ意見を言っていたように思うのですが」）

When？ 「いつのことですか」「いつまでにですか」

Where? 「どこですか」「どういう点が同じなのでしょう」「どういう点が違っているのでしょう」

Why？ 「どうしてそう思いますか」（その**理由**を述べてくれますか）（その例をあげてくれますか）「どうしてそれが本当だと思いますか」（その**証拠**をあげてくれますか）「なぜそういうことをすると思いますか」（その**目的**を言ってくれますか）「どうしてそういうことが起こると思いますか」（その**原因**はわかりますか）

How？ 「A さんはどういう風に考えているのですか」「それは、A さんの考え／意見とどう違うのですか／どう同じなのですか」「どのように考えますか」「そんな風に考えると、どうなりますか」

コメントの追加 [km1]: 1.8 と 1.9 はペアーを作って 10 分間練習する。たとえば、「今どんなことにはまっていますか」という問いに相手がどう応えるかで、これらの質問を使って会話の練習をする。

2. 議論に参加する人がとることが求められる態度

2.1. **積極的に聞く(active listening)**
2.2. 意味を問う
2.3. 的を絞った質問をする
2.4. 自分の意見を他の人に言う
2.5. 他の人に賛成か反対かを述べる
2.6. 何か重要なことを言うとき、あるいは理解できない時は、議論に割って入る
2.7. アイコンタクトをしっかりとる
2.8. 聞くときにふさわしい言葉をかける（ワオー、本当に?、なるほど）
2.9. 話している人に顔を向ける
2.10. 自分が関心を持っていることを示すジェスチャーをする（逆に、無関心を示すようなジェスチャーはしない）

3. 教師の役割

授業の最初にペアを組ませて、5 分くらいのウォーミングアップをさせてもいい。生徒 2 人がペアになり、最初に一人が今日あったことなどの報告をし、その報告に対して、問いを作っていき、報告した生徒はそれに応える。2 分半ほどしたら交代する。

あるいは、簡単なエクササイズをする。

3.1. クラス全体の議論を準備する
3.1.1. 子どもたちはお互いの顔が見えるように輪になって座る（授業時間を考慮すれば椅子に座るのが良い）
3.1.2. 子どもたちの発言や質問を書き取る大きな紙を用意する（パソコンで打って、それをスクリーンで見れるようにしてもいい）
3.1.3. クラスのすべてのメンバーが発言の機会を持てるようにする
3.1.4. クラスの規模が大きいと思えるなら、グループを二つ作り、一つは教師が、他は生徒自らが議論を進めるようにする。あるいはグループを 2 重にして、一方が議論をし、他方がその周りで議論を観察する。後者の場合、観察する児童生徒は、議論の特徴や発言等に関する評価をさせるノートを持たせる
3.2. 必要なら、ペアを組んだり、小グループでの議論も可能になる場を設定する
3.2.1. このときも、子どもたちはお互いの顔が見えるように輪になって座る
3.2.2. 最初から小グループを作る場合は、議論のテーマを各グループから出させて、どれを議論するかを決めて、各グループで議論させることもできる（3.7 以下の流れを参考）
3.2.3. 途中から小グループを作る場合は、クラス全体でのテーマについて各グループで議論させて、各グループの議論の中身を発表させ、さらに議論する。これは、議論の途中で発言する生徒が固まってきたとき、参加していない生徒を参加さ

せるのによい方法である（3.10.14 参照）

3.3. 物語／絵本を読む

3.4. 読んでいるときに、子どもが理解しているかをチェックする

3.5. 理解していないようであれば、言葉や文を説明する

3.6. 議論の開始

3.7. 物語を読んだ後、問いを出させる（変に思ったこと、はてなと思ったこと、面白いと思ったことなど）（**Question**）

3.8. 問いを板書する。その問いを発した子どもの名前を書く

3.9. 出された問いをグループ分けする

3.10. どの問いを議論したいかを検討する

3.11. 議論する問いが決まれば、その問いを提出した子どもに、どういうことを考えていたのか説明させる

3.12. 議論のリードの仕方。子どもたち自身が議論するとき、このリードの仕方を学んでいくようにする。

3.12.1. 内気な児童生徒に話すようにさせる

・由紀は . . . と言っているけど、弘子、君はどう思う?

・～について、みんな私の意見に賛成かな?

・そうね、裕子ならどう思う?

・典子、何か付け加えたいことはあるかな?

3.12.2. 話をしたがる児童生徒に対して、他の子が話すように仕向ける（その児童生徒を遮ってはいけない）

・なかなかいい指摘だね、有難う

・もう他の人の意見を聞こうね。

・もう他の人に意見を言ってもらおうね。

3.12.3. 小さい声の子にはもっと大きな声で話すようにさせる

・真知子（聞き取りにくそうにしている子に）、亨の言ったことは聞こえた／分った？

・もう少し大きな声で言ってくれる。

・君の言っていることはみんなに聞こえていないようだよ。

・こういうことですか？

3.12.4. 話の筋から外れた児童生徒を本筋に戻すようにする

・うーん、元の話に戻ろうか

・真理子が言っていたことに返ろう

・徹、今議論していることはこれでよかったかな？

3.12.5. 言おうとしていることの定義を求める（**Definition**）

・～とは何だろう？

例：

「コミュニティーって何だろう」、という教師の質問に、子どもは、「ほら、野球では、キャッチボールをすけど、コミュニティーって、言葉のキャッチボールをして、みんなでいろいろ話し合うところじゃないかな」という回答をした。

「私は地球人も宇宙人だと思います。**なぜなら**、宇宙の中に地球があって、そこに私たちがいる**から**、自分たちも宇宙人。」

3.12.6. 言っていることがはっきりしない子には、もっとはっきり言ってもらう（**Clarity**）

・言っていることがよく分らないのだが、もう一度言ってくれる？

・どういうことを言おうとしているのかな？。

・薫が言おうとしているのは、…ことかな？

・徹、薫が言っていることは分るかな？

3.12.7. 意見や考えの違いの特徴／他と区別で（きる特徴に気付かせる（**Distinctiveness**）

・どうして、その違いが言えるのかな？

・他に誰か違った**理由**や**例**をあげられますか？

3.12.8. 首尾一貫性のない発言をした子には、そのことを気づかせるようにする（**Consistency**）

・徹、前にはこう言っていたけど、今度はこう言いたいのかな。それでいい／同じ考えかな／どうして？

・愛子、こうも言えれば、ああも言えるのかな？

・徹はこう言ったけど、愛子はああ言っているね。どっちとでも言えるだろうか？

3.12.9. 判断するときの理由／根拠／証拠／基準／前提を尋ねる（**Reason, Criteria, Evidence, Assumption**）（子どもたち自身が発言する子どもにこれらの問いを出せる環境を作る。これは **disagreement** の表明となるので、子どもには難しい質問である）

・どうして、その**理由**は？

・どうして、何か**例**があるかな？

・どうして、そう思うのですか？

・公子、どうして君は彼らが友達だと思うの？

3.12.10. 別の選択肢の可能性を示唆する（**Alternative**）

・誰か別の意見はありませんか？

・別の見方はできないかな？

3.12.11. 誰かが新しい意見／発見／違いを提出したら（創造・発見 **Creativeness**）

・それは面白い考えだね、もう一度説明してくれる？

・それは新しい視点だと思うけど、みんなどう思う？

3.12.12. 議論の過程から、どういうことが導き出されるかを検討する（推論 **Inference**）

・今までの議論から、どういうことが言えるだろうか?

・そうすると、どうなるかな？

・もしもそうなると、どういうことになりますか?

例：

・僕は幽霊を信じません。なぜかというと、幽霊がほんとにいたら、夜の間に何か異変が起きているはずなのに、何の異変もないから、僕は幽霊を信じません。（これは、P⊃Q、~Q、∴~P　という論理式を使っている）（これは幽霊がいればあるはずの何の異変もないという証拠を述べる）

・宇宙人はいると思います。なぜなら、メキシコで UFO が現れたら、遠くで動かしているとしても、宇宙人が運転していることになるし、中で宇宙人がいても、宇宙人が運転していることになるから、やっぱり宇宙人がいて、人間には多分 UFO を運転できない。

宇宙人は存在する：P

UFO が存在する：Q

UFO を運転できるものが存在する：R

UFO が存在すれば、宇宙人は存在する。なぜなら、UFO を運転できるのは宇宙人だけだから（UFO を運転できるものはすべて宇宙人である)。

Q⊃R、R⊃P、Q、∴P

3.12.13. 調べてみた方がいい状況になったら、授業中か宿題として、それをペアあるいはグループで調査させ、発表させる（**Research**）

3.12.14. 発言する児童生徒が固まってきたら、ペアあるいはグループで話し合わせる

・今議論していることをグループ／ペアで一緒に考えてくれますか?（グループの意見を言ってもらう。この時、大抵は、グループのメンバーで発言していない子どもに発言するように、グループ自身が行っている）

・今の意見に賛成の人（反対の人、どちらとも言えない人）は手を挙げてください。(その中からあまり発言をしていない人にあてて、その理由なり例なりを聴く）

3.13. 教師の注意すべきこと

3.13.1. 自分が哲学の専門家あるいは主題の権威であるよう態度は見せない

3.13.2. 自分の意見を言うときは、それに特別な重みをもたせない

3.13.3. 子どもたちが教師に向かって話をするようにしないこと

4. 子どもたちの発言の分析

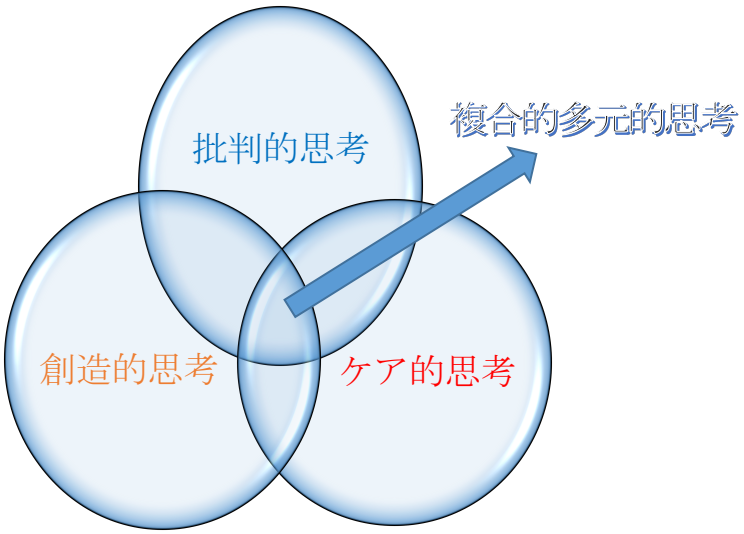
M・リップマンは哲学的思考を、「批判的思考」「創造的思考」「ケア的思考」の 3 つに分けている。

4.1. 批判的思考　自分の発言、他者の発言を吟味して、理由・根拠を示す。

4.2. 創造的思考　新しいものを生み出す思考

4.3. ケア的思考　思考を単に論理的な構造に限定するのではなく、発言する相手に対して配慮しようとする思考。発言する相手の状況や背景に対する思いやりを持った思考。議論を進め、深めようとする思考

子どもたちの発言の中に、これらの思考が明確に見て取れる場合もあるし、複合的に重なり合っている場合もある。それを読み取っていく努力をする。



5. 評価

5.1. 自己評価と相互評価

自己評価と相互評価のための項目（５段階評価をしてもらい、その理由も書いてもらう。評価の結果を子どもたちがシェアできる環境を作る）

（以下の評価項目は学校や授業形態に応じて変えることができる）

5.1.1　対話は興味深く、楽しかったですか。

楽しくなかった　　わりと楽しかった　　とても楽しかった

1　　2　　3　　4　　5

理由

例えば、子どもが 4 に○を付け、その理由として、「友だちの A さんがこういう発言をしたのを聞いて、そういうこともあるのかと興味を持った」と述べたとすれば、このコメントは、自己評価だけでなく、A さんに対する他者評価になっている。このような評価を A さんに帰してあげ、評価を共有する。

5.1.2　あなたは友だちの話をどれくらい聞けましたか。

聞けなかった　　わりと聞けた　　よく聞けた

1　　2　　3　　4　　5

理由

5.1.3　あなたは自分の考えを表現できましたか。（大きな声で気持ちよく、理由や例をあげて）

表現できなかった　　わりと表現できた　　よく表現できた

1　　2　　3　　4　　5

理由

5.1.4　あなたは何か新しいことを学びましたか。新しい考えや理解を積み上げることができましたか。

できなかった　　わりとできた　　よくできた

1　　2　　3　　4　　5

理由

5.1.5　私たちはテーマを掘り下げたでしょうか。よい議論ができたでしょうか。

掘り下げられなかった　　わりと掘り下げられた　　よく掘り下げられた

1　　2　　3　　4　　5

理由

5.1.6　私たちは対話に集中していましたか。

集中できなかった　　わりと集中できた　　よく集中できた

1　　2　　3　　4　　5

理由

5.1.7　私たちは、議論に新しい流れを作り出すことができましたか。

作り出せなかった　　わりと作り出せた　　よく作り出せた

1　　2　　3　　4　　5

理由

5.2. 教師による評価

5.2.1　探求のスキル

5.2.1.1　子どもたちは実りある質問を出しましたか　1　2　3　4　5

5.2.1.2　子どもたちは理由／証拠に言及しましたか　1　2　3　4　5

5.2.1.3　子どもたちは説明を求めましたか　1　2　3　4　5

5.2.1.4　子どもたちは別の選択肢を探求しましたか　1　2　3　4　5

5.2.1.5　子どもたちは自己修正に関わりましたか　1　2　3　4　5

5.2.1.6　子どもたちは論点にこだわりましたか　1　2　3　4　5

5.2.2　推論と概念のスキル

5.2.2.1　子どもたちは意味を明確にしましたか　1　2　3　4　5

5.2.2.2　子どもたちは有益な違いをつけましたか　1　2　3　4　5

5.2.2.3　子どもたちは適切な比較をしましたか　1　2　3　4　5

5.2.2.4　子どもたちは役に立つ例を示しましたか　1　2　3　4　5

5.2.2.5　子どもたちは妥当な推論をしましたか　1　2　3　4　5

5.2.2.6　子どもたちは賢明な判断をしましたか　1　2　3　4　5

5.2.3　相互行為

5.2.3.1　子どもたちはお互いに傾聴しましたか　1　2　3　4　5

5.2.3.2　子どもたちは議論をシェアしましたか　1　2　3　4　5

5.2.3.3　子どもたちはお互い助け合いましたか　1　2　3　4　5

5.2.3.4　子どもたちは意見の不一致を検討しましたか　1　2　3　4　5

5.2.3.5　子どもたちはお互いの意見を尊重しましたか　1　2　3　4　5

5.2.3.6　子どもたちは自分の意見に対する公正な批判を受け入れましたか　1　2　3　4　5

6.　子どものための哲学への主題の例

物語や絵本を読んで、そこから子どもたちの問いを引き出し、議論を進めていくという方法以外に、子どもたち自身が普段考えながらも、なかなかみんなと話し合えないような問いを出してもらい、それについて議論をしていくという方法もある。この場合、子どもの出す問いには、その子どもが住まう背景がある。この含意 implications を把握することは、生徒・児童指導に生かすことができる。また、議論の途中での問いや発言にも子どもの生き方

の含意を読み取ることもできる。「なぜこの子は今このような問いを出したのだろう」ということを、教師は常に自覚すべきである。
　子どもたち自身が興味を持っていると思われる問いの例

　美とは何か？
　正しいとは何か？
　幸福とは何か？
　平和とは何か？
　自由とは何か？
　生とは何か？（私たちはなぜ生まれたのか）
　死とは何か？（私たちはなぜ死ぬのか）
　時間とは何か？
　現在とは何か？
　未来（将来）とは何か？
　働くとは何か？
　先生とは何か？
　神とは何か（神は存在するか）？
　幽霊とは何か（幽霊は存在するか）？
　サンタクロースとは何か（サンタは存在するか）？
　嘘とは何か？
　嘘をついた人は嘘つきと言えるか？

　私たちはこの目で見たことを信頼できるか？（見たことがある、見たことがないとはどういうことか？）（錯視のこと、エッシャーなどの絵を見せる）
　聞くということと見るということはどう違うだろうか？
　自分を大切にするということはどういうことか？
　友情とは何か？
　私たちはどんなとき、ドキドキするだろうか？
　「本当」って何なんだろう？
　「絶対に」ということはあるだろうか？

夢に関して子どもたちの出した問い
・人間はなぜこれと一つに決めたことを極めたがるのか。
・得意なことを人は夢にするのか。
・１０歳ぐらいからなぜ一つのことに集中するのか
・２つでもやれるのになぜ夢を一つにするのか。

・自分が考えられない意外な夢が多いのはなぜか。
・小さいころ夢が多かったのに夢が一つになるのはなぜか。
・野球をするのが楽しいから夢を持つのか。憧れがあるから夢をもつのか。
・人間はなぜ夢を持とうとするのか。
・どうして夢というものが存在するのか。
・なぜ人は親に反対されても夢に向かっていくのか。
・夢と現実の違いは

・みんなは喧嘩したことがありますか？それじゃ、どうして喧嘩が起こるんだろう。

7. エクササイズ

・おじいちゃんと孫の浩太君がバスに乗っていました。バスは止まっていましたが、動き出しました。浩太君はおじいちゃんに尋ねました。「おじいちゃん、どうしてバスは動くの？」
二人がどんな状況にいるかを想定して、浩太君の問いに答えなさい。
（「どうして？」「なぜ？」という問いは、理由、原因、目的のいずれを問うているのか）

・いろいろな「なぜ」

a. なぜあなたはサッカーが好きなんですか？
b. なぜあなたは今サッカーをしているんですか？
c. なぜ人は性格が違うのだろう？（ある授業では、どのようにして違う性格が生まれるのだろう、作られるのだろう？という問いに変質していった）
d. なぜ三角形の内角の和はニ直角なのだろう？
e. なぜ人は幸福になりたいのだろう？
f. なぜ地球は太陽の周りを回っているのだろう？
g. なぜ人は嘘をついてはいけないのだろう？
h. なぜ人は嘘をついてしまうのか？
i. なぜ嘘をついてはいけないのか？
j. なぜ勉強しなければいけないのか？
k. なぜ校則があるのか？
l. なぜ私たちは人を嫌いになるのか？
m. なぜ人を殺してはいけないのか？
n. 約束は守るべきか？
o. なぜ私たちは言葉を語るのか？
p. 国によって言葉が違うのはなぜか？

・次の二つの文章で、同じものがあります。それは何でしょう？

a. 昨日は雨だったので、公園に行く予定でしたが、家で子どもと遊びました。

b. 太郎ちゃんは、お父さんが学校の先生をしています。それで、太郎ちゃんは将来学校の先生になる夢を持っています。

・次の文章を読んで、なるべくたくさんの問いを作りなさい。

「昨日は雨だったので、公園に行く予定でしたが、家で子どもと遊びました。」

・雨が降ると天気はよくないですね。とすると、天気がよければ雨は降っていませんね。それでは、雨が降っていないと天気はよいでしょうか。

・人間はいつかは死にますね。とすると、死ぬものは人間と言えるかな。また、死なないものは人間とは言えないかな。

・人間は理性的動物であると言われます。とすると、理性的動物でなければ、人間ではありませんね。それでは、人間でないと理性的動物ではないのでしょうか。

参考文献

河野哲也『子ども哲学』(河出ブックス)、河出書房新社、2014 年

マシュー・リップマン『探求の共同体　考えるための教室』河野哲也・土屋陽介・村瀬智之訳、玉川大学出版会、2014 年

Philip Cam:『共に考える』、萌書房、2015 年（*Thinking Together, Philosophical Inquiry for the Classroom*, Primary English Teaching Association and Hale & Iremonger, 1995.）

p4c.japan のウェッブ：p4c.japan.com